『十三世紀フランス語聖書』（*Bible française du XIIIe siècle*）彩飾写本研究：フランス北部の作例と＜パリ-アッコンの画家＞をめぐって

駒　田　亜紀子

はじめに[1]

『十三世紀フランス語聖書 *Bible française du XIIIe siècle*』は、13世紀中葉にパリで成立した、初の完訳版フランス語聖書である[2]。今日、断片を含め、13世紀後半から15世紀後半にかけて制作された30点余の写本作品が伝存するが、その多くは何らかの挿絵彩飾を伴う作例である[3]。本論では、『十三世紀フランス語聖書』の普及期（1280-90年代）にフランス北部で制作されたと見られる２点の姉妹写本（Bruxelles, Bibliothèque royale de Belgique, ms. 10516、以下 KBR 10516と略す、および Saint-Omer, Bibliothèque d'Agglomération, ms. 68、以下 St-Omer 68と略す）（図１－９、16、17）を取り上げ、パリに並ぶ『十三世紀フランス語聖書』の重要な伝播・流通の場であった北部地方における同聖書の展開の一端を明らかにしたい。同時に、これら２点のフランス語聖書の画家たちが、パリならびに十字軍国家最後の拠点となったアッコンにおいてフランス語聖書の展開に重要な役割を果たしたいわゆる＜パリ-アッコンの画家（＝聖ヨハネ騎士団の画家）＞と、様式および図像学的源泉を共有していることを指摘し、未だ有力な手掛りに乏しいこの画家の様式的出自や図像学的源泉をめぐる諸問題を解明する端緒としたい[4]。

１．『十三世紀フランス語聖書』初期写本伝承と KBR 10516および St-Omer 68の位置付け

『十三世紀フランス語聖書 *Bible française du XIIIe siècle*』は、サミュエル・ベルジェが1884年に公刊した中世フランス語聖書研究の第３部において、13世紀中葉にパリで成立した散文体フランス語によるラテン語ウルガータ訳聖書の初の全訳テクストを指して命名した写本テクストである[5]。本稿の対象となる KBR 10516および St-Omer 68は、いずれもこのベルジェの研究で取り上げられた、『十三世紀フランス語聖書』後半部（箴言～黙示録）を収録する写本である。KBR 10516は、この1884年の著作において、聖書後半部を収録する作例の中でも同テクストの比較的初期の（オリジナルに近い）段階を伝える写本の一つとして、Fr. 899等とともに言及されている[6]。一方、St-Omer 68については、ベルジェは本文書体および彩飾の様式からその制作年代を14世紀とし、これを根拠に同写本を

『十三世紀フランス語聖書』ではなく『増補版歴史物語聖書 *Bible historiale complétée*』の後半部と判断している[7]。

一方、1960年代以降、ベルジェの研究では検討対象とされなかった写本や1884年当時は存在が知られていなかった写本を加え、新約聖書諸書の校訂版編集に向けて詳細な分析・考察を行っているのが、デ・ポールク、デコー、スネッドンらによる研究である[8]。中でも、クライヴ・スネッドンは、1978年オクスフォード大学に提出した博士論文とその後の雑誌論文において、個々の写本本文の特定個所の照合に基づき、『十三世紀フランス語聖書』福音書の初期写本伝承系統図を作成した[9]。それによれば、『十三世紀フランス語聖書』写本の初期伝承には４つの段階（*states*）、すなわち初期段階 *x*、これより派生した二つの相互に独立した改訂版（*revision*）*a* および *b*、そして改訂版 *b* よりさらに派生した *b6* を識別することができる。スネッドンによる初期写本伝承系統図においては、St-Omer 68および KBR 10516はこれら２点のみにより構成される改訂版 *a* に属し、相互に密接な関係を有するとされる。

以下に続く本論では、『十三世紀フランス語聖書』のテクスト伝承において密接な関係にあるとされる KBR 10516および St-Omer 68について、挿絵彩飾の様式や図像学的特徴などの観点から、両写本の位置付けを考察する。

２．ブリュッセル、ベルギー王立図書館、10516番写本（Bruxelles, Bibliothèque royale de Belgique / Koninklijk Bibliotheek van België, ms. 10516）[10]（図１－４）

328フォリオ、340 x 220mm

収録テクスト：箴言～黙示録

制作地：フランス北部（ ?）

制作年代：1280～1290年代初頭（ ?）

KBR 10516は、旧約聖書後半部（知恵文学、預言書、マカバイ記）および新約聖書全編を収録する、『十三世紀フランス語聖書』写本の一つである。現状では創世記～詩篇までの旧約聖書前半部が欠落しており、２巻本構成の写本の後半部のみが伝存したものと考えられる。

KBR 10516の伝来に関する最古の記録は、ヴァロワ朝ブルゴーニュ公第３代フィリップ善良公の死後に編纂されたいわゆる1467年の蔵書目録に遡る[11]が、この時点ですでに現存する聖書後半部のみが記録されていた。KBR 10516に関する記録は、続いて、1487年にブリュッセルで編纂された蔵書目録中に現れるが、ここでは同写本の当時の装丁金具にエノー伯およびバイエルン公の紋章が表されていたことが、その記述より知られる[12]。この記述に基づき、フランスの中世彩飾写本研究の泰斗ポール・デュリューは、ブルゴーニュ公由来のフランス語聖書写本に関する1895年の論考の中で、フィリップ善良公が、KBR

10516を、自身の母すなわちエノー及びホラント伯であったバイエルン（ヴィッテルスバッハ家）のアルブレヒトの娘マルガレーテから相続、あるいは自身の従姉でありバイエルン＝ヴィッテルスバッハ家出身でエノー及びホラント伯を称した最後の人物であったジャクリーヌが1433年にエノー及びホラント伯領をブルゴーニュ公に譲渡した際に入手したもの、と推測している[13]。ただし、エノー伯およびバイエルン公の紋章を伴う装丁が[14]、写本の制作地や制作年代を直接に証拠立てる訳ではない。

KBR 10516の挿絵彩飾は、聖書各書の冒頭に配されたテクスト欄（40行）１コラム分の幅（約75ミリ）を占める長方形のパネル状ミニアテュール51点[15]、聖書各書ならびに各章冒頭を記す朱・青２色のインクによるフィリグラン（線条装飾）イニシアル、ページ上端余白に配される朱・青インクによるランニング・タイトルより構成される。これらの挿絵彩飾については、上述のポール・デュリューによる1895年の論考を嚆矢とするブルゴーニュ公蔵書研究での簡単な言及を除けば、筆者の知る限り、美術史研究における本格的な考察はなされていない。1937年ブリュッセルで開催された展覧会の図録に簡単な言及があるものの[16]、1937～1989年にかけて刊行されたベルギー王立図書館所蔵の主要彩飾写本カタログ（全３巻）[17]の対象から外れ、フィリップ善良公蔵書をテーマとする1967年開催の展覧会図録[18]においても写真図版無しの扱いであったため、美術史研究者の注意を引く機会に乏しかったのであろう。13世紀後半の北フランス写本彩飾の体系的研究に道を拓いたロバート・ブランナーの1977年刊の遺作[19]や、13世紀最終四半期のフランス語聖書写本彩飾に関して初めて本格的な論考を展開した1976年刊のJ.フォルダの労作[20]にも、言及は無い。

聖書各書の冒頭に扉絵として配された計51点のパネル状ミニアテュールは（図１-４）、仕上がりに少々のばらつきが認められるものの、単独の挿絵画家の手に拠るものと考えられる。この画家の様式的特徴は、まず人物表現に求められる。相貌は、額の生え際から顎まで直線的なシルエットを描く頭部とやや四角張った顎、緩やかな弧を描く長めの眉とそれに続く扁平なＳ字形ラインにより描かれた鼻、小さな杏仁形の目の童顔気味の顔立ち、男性頭部において額生え際中央部から後頭部に向かい平行線を描くオールバック様の部分や、生え際から顔の輪郭に沿って側頭部に向かう頭髪が耳を囲むように描く大きな同心円状のウェーヴをなす髪形、等を特徴的な細部とする。立像は、緩やかで大振りな弧を描く衣襞の長衣に直線的なシルエットのマントを羽織り、多くの場合、片手で指を立て語りかける仕種をする一方、他方の手でマントの中ほどを掴む。摘み上げられたマントは緩やかな袋状の襞で肘を覆いながらも松葉状の直線的な襞となって落ち、裾の部分で逆Ｖ字形のエッジを描きながら単純化された直線的なシルエットに還元される。衣襞は黒の細い描き起し線により表現され、黒の輪郭線と衣の縁をめぐる白の縁取り線により輪郭が強調された平面的な賦彩を特徴とする。人物の衣の彩色にはブルー、ローズ、朱色、白色を主体とするパレットに時折エメラルド・グリーンが加わり、背地には研磨された金地ないしは３個組の小さな白点を散らしたブルーあるいはローズが一様に塗られる[21]。また、挿絵の主

題や描かれた場面とは無関係に、サーモンピンクやブルーに塗られたアーチ形[22]あるいは小塔を戴く切妻屋根形[23]により金地を背にした登場人物を枠取る構図は、本作に頻出する画面構成である。現存する挿絵にはこうしたアーチ以外に特定の場面描写に関わる建築モティーフは無く、祭壇や説教壇あるいは玉座などごく限られた構築物により場面を構成する。これらの建築モティーフや構築物は、祭壇の天板を除き、いずれも完全な正面あるいは側面観として把握されており、金あるいは単色の背地ともあいまって、画面に三次元的な奥行き表現は認められない。

研究の現状では、KBR 10516の挿絵画家による他の写本作品を同定することは難しいが、ブリュッセルの聖書の挿絵と様式的に最も関連が深いと考えられるのは、いわゆる「パリ-アッコンの画家」あるいはその追随者たちの作品である（cf. 図13-15）[24]。KBR 10516の画家を特徴付ける人物頭部の形状や相貌、中でも額生え際中央部から後頭部へと平行に撫で付けられた前髪と耳の辺りの同心円状の大きなカールは、KBR 10516の画家とパリ-アッコンの画家に共通するメルクマールである（cf. 図３、４、14、15）。衣襞については、パリ-アッコンの画家はKBR 10516の画家に比べ人物をよりタイトに包み込む傾向があるが、座像において大きく緩やかな弧を描き大腿部から脛を覆う襞や、逆Ｖ字形のエッジを描きつつ単純な直線的シルエットに還元される裾など、両画家は基本的なパターンを共有している（cf. 図１、２、15）。こうした人物表現に加え、両画家の間には、〈獅子の穴の中のダニエル〉の洞窟外側の渦巻き状のパターンをなす土坡（図３、13）[25]などの特徴的なモティーフにも緊密な類似関係が認められる。

挿絵図像について見ると、KBR 10516に含まれる51点の挿絵の多くは史伝的な場面描写には馴染まない知恵文学や預言書あるいは書簡の扉絵であり、定型化した図像[26]や、アトリビュートや巻紙を携えた類型的な容姿の使徒・預言者の座像あるいは少人数の立像を並べた単純な構図が目立つ（図１）。しかしながら、〈大魚の口から脱出するヨナ〉の大魚およびその口の端に爪先を掛けるヨナの左足の表現（図４、14）[27]や、〈エゼキエルの幻視〉において画面上辺中央から左右に幕を引くように配されたローズとブルーの２色の雲の合間に頭部を突き出し画面下方の寝台に横たわる預言者を見下ろす四活物の表現（図２）[28]など、パリ-アッコンの画家とKBR 10516の画家は、預言書の扉絵としてはごく一般的な主題表現においても、同時代の同主題の作例から明確に区別される[29]特徴的な細部を共有している。

KBR 10516の画家に関する以上の考察は、差し当たり次のように総括できよう。KBR 10516の画家は、1280年頃までパリで活動しその後十字軍遠征の最後の拠点であったアッコンに渡り同地で1290年頃まで活躍したパリ-アッコンの画家と、密接な様式的関係を有する。両者は、人物の相貌や衣襞の表現、あるいは土坡などの特徴的なモティーフの描写に加え、聖書を典拠とする一般的な主題の表現においても、両者を他の同時代の挿絵画家たちから区別するに足る特徴を共有する。

３．サン・トメール、市立図書館、68番写本（Saint-Omer, Bibliothèque d'Agglomération, ms. 68）[30]（図５－９、16、17）

282フォリオ、290 x 215mm

収録テクスト：箴言～黙示録

制作地：フランス北部（?）

制作年代：1280～1290年代初頭（?）

St-Omer 68は、旧約聖書後半部（知恵文学、預言書、マカバイ記）および新約聖書全編を収録する、『十三世紀フランス語聖書』写本の一つである。現状では創世記～詩篇までの旧約聖書前半部が欠落しており、２巻本構成の写本の後半部のみが伝存したものと思われる。聖書本体を構成するフォリオ（現行のアラビア数字によるフォリオ番号で fol. 1-275v）のレクト面下辺余白に15世紀に書き込まれたローマ数字による旧フォリオ番号（fol. 1-63 ; 72-80 ; 97-179 ; 199-249 ; 263-294 ; 306-341）には複数箇所に欠落があり、全体の約２割に相当する紙葉が失われたことが分かる[31]。

St-Omer 68はサン・トメールのサン・ベルタン修道院に由来する。同修道院の所有となった時期および経緯は不明であるが、箴言の冒頭（fol. 1）には17世紀に遡ると見られる同修道院のシェルフ・ナンバー“79”が振られている。フランス革命後、他の多くの同修道院由来の写本とともにサン・トメール市立図書館の所蔵となり、今日に至る。

St-Omer 68には、『十三世紀フランス語聖書』の他に、14世紀、巻頭に１冊、巻末に２冊、計３冊追加された折丁（巻頭：fol. A-G；巻末：fol. 276-278 ; 279-282）に、14～15世紀の間に書き加えられた様々なテクストが見出される[32]。これらのテクストの何点かにはピカルディ方言の特徴が認められることから[33]、聖書本体の制作からさほど時を経ない14世紀の時点で[34]、追加折丁および聖書本体は（サン・トメールもその中に含まれる）ピカルディ方言使用圏に存していたと考えられる。

St-Omer 68の挿絵彩飾は、聖書各書の冒頭に配されたテクスト欄（40行）１コラム分の幅（約75ミリ）を占める長方形のパネル状ミニアテュール31点とコラム半分程度の幅を占める物語イニシアル10点、聖書各書ならびに各章冒頭を記す朱・青インクによるフィリグラン（線条装飾）イニシアル、ページ上端余白に配される朱・青インクによるランニング・タイトルより構成される。これらの挿絵彩飾については、13世紀後半～14世紀前半フランス写本彩飾の総括的研究の嚆矢となったG.ヴィツトゥムの1907年の著作[35]とアラスで1951年および1993年に開催された展覧会図録[36]に簡単な言及があるものの、筆者の知る限り、美術史研究における本格的な考察はなされていない。

St-Omer 68の挿絵彩飾は、彩飾様式ならびに挿絵図像の両面において、KBR 10516と密接な関係を持つ。研究の現状では、St-Omer 68の画家による他の写本作品を同定することは難しいが、その挿絵彩飾は、KBR 10516のそれと、制作地・年代を含めた様式的基

盤を一にすると言ってよかろう。人物の一般的な相貌・身振りや衣襞の扱い（図１、５-８）、金地あるいはブルーやローズの背地にアーチを多用する[37]画面構成、同一意匠の画面枠（ブルーとサーモン・ピンクの地に白の細線による幾何学文様を重ねた太い帯状の枠縁を、白のハイライトを点じた朱色の正方形により四隅で繋ぎ、外側を連続する細いベージュの枠で囲む）（図１-９）や、朱・青２色の刳り形により塗り分けられた大型イニシアルとその内外のスペースを充填するフィリグラン（線条装飾）のパターン（図１、３-８）に至るまで、両者は強い類似性を示している。KBR 10516の画家と比べると、St-Omer 68の画家の描く人物は、やや面長の頭部にウェーヴの緩い頭髪、曲線をより強調した重い印象の衣襞に幾分貧弱な体躯、等により識別されよう（図１、６-８）。

St-Omer 68の画家の人物表現には、KBR 10516の画家がパリ-アッコンの画家（cf. 図14、15）に対して示すような強い様式的類似性は、それほど感じられないかも知れない。しかしながら、場面を構成する様々なモティーフは、St-Omer 68の画家とパリ-アッコンの画家が、共通のレパートリーを基盤としていることを示す。例えば、〈偶像崇拝者の処刑を命ずる預言者〉を描く「ゼファニヤ書」扉絵（図８）の預言者と剣を振りかざす処刑人の上半身のポーズは、M. 494（図15）および『アッコンのフランス語聖書』（Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. nouv. acq. fr. 1404, fol. 123v）の列王記２の扉絵〈アマレク人の処刑〉[38]中のダヴィデ王および処刑人のそれと、共通のモデルに遡ると考えられる。また、「ミカ書」の扉絵に描かれた都市は、手前側に大きく刳られた円筒状の城壁と太い２基の塔の間に細い尖塔を並べた街並みを特徴とするが（図７）、これは、パリ-アッコンの画家による『エルサレム王国年代記』等の挿絵に頻出する城壁や都市を強く想起させるものである（図13）[39]。加えて、KBR 10516において、左右に分かれた雲から頭部を覗かせ寝台に横たわる預言者を見下ろす四活物の表現にパリ-アッコンの画家との関連を認めた〈エゼキエルの幻視〉（図２）については、St-Omer 68のそれは、預言者の頭部の向きや左腕のポーズに至るまで、M. 494の同主題挿絵に酷似する[40]。

St-Omer 68、KBR 10516そしてパリ-アッコンの画家が人物表現や個別の挿絵場面を構成する様々なモティーフのレパートリーにおいて共通の基盤を有する一方、『十三世紀フランス語聖書』としてのSt-Omer 68およびKBR 10516の挿絵図像の内容構成は、両写本が実際に非常に近しい環境において制作されたことを示す。興味深いのは、KBR 10516中の「コヘレトの言葉」、「知恵の書」、「集会の書」などの知恵文学の扉絵に目立つ図像学的な混乱が、St-Omer 68の挿絵に類する図像モデル[41]を誤って適用あるいは解釈したことに起因すると思われることである[42]。例えば、KBR 10516の「コヘレトの言葉 Ecclésiaste」扉絵（fol. 16v：頭光を戴く長衣・マントの人物が天を指さす）は、本来は「集会の書 Ecclésiastique」（«Toute sapience est en Deu qui est Nostre Sires . . .（すべての知恵は、主から来る）»）[43]扉絵に適用されるべき図像（cf. 図６：頭光を戴く長衣・マントの知恵者が短衣の若者と世俗の王に天を指し示す）から〈天を指差す知恵者〉のみを取り出し、誤って適用したものと思われる。フランス語によるテクスト標題«Ecclésiastes

(コヘレトの言葉)»と«Ecclésiastique（集会の書)»の混同に起因する、図像の誤った解釈・適用であろう[44]。また、KBR 10516の「知恵の書 Sapience」扉絵（図１：抜身の剣を持つ騎士と短衣の若者に世俗の王が天を指し示す）は、「知恵の書」(«Amez justice vos qui jugiez la terre…»)[45]扉絵に本来適用されるべき図像（cf. 図５：玉座の王が正義の騎士に抜身の剣を授ける）から「抜身の剣」と「騎士」を取り出し、「集会の書」扉絵に適用されるべき図像（cf. 図６：頭光を戴く長衣・マントの知恵者が短衣の若者と世俗の王に天を指し示す）の「知恵者」と入れ替えると同時に、「天を指し示す」役割を「知恵者」から「世俗の王」に振り向け、さらにこれを「集会の書」から「知恵の書」に移すという、複雑怪奇な三重の組み換え操作に由来するものと思われる。「集会の書」冒頭句«Toute *sapience* est en Deu qui est Nostre Sires …»中の「知恵 *sapience*」の語が「知恵の書 *Sapience*」との混同を誘ったことが混乱の発端であろうか[46]。

St-Omer 68の「集会の書」扉絵（およびこの系統のモデルを誤用した KBR 10516の「知恵の書」扉絵）は、同扉絵の図像ヴァリアントとしては筆者の知る限り他に類例を見ないユニークな構図を示す（図６）。本稿で詳述する余裕は無いが、13世紀後半～14世紀初頭の「集会の書」扉絵の図像レパートリーは、おおよそ次の３タイプに分類することができる。(1)「知恵」の擬人的表現あるいは著者像（一人称で読者に語りかける著者を、様々なアトリビュートを伴う知恵の擬人像、玉座のキリスト、頭光を戴く男性の知恵者、玉座の王などとして描く）が単独像あるいは人々に教え諭す姿により表現される。(2)「キリスト教会（エクレシア)」の擬人像（白いヴェールに冠を戴き両手に聖杯や十字架付き錫杖あるいは教会堂の縮小模型などのアトリビュートを持つ女性像；「ユダヤ教会（シナゴーグ)」の擬人像と対で表現されることもある)。(3) 聖母子像。『十三世紀フランス語聖書』に多いのは（2）および（1）の作例である。St-Omer 68の「集会の書」扉絵は（1）のヴァリアントと考えられるが、王冠を戴く王も含め登場人物全員を立像で表した作例は、筆者の知る限り、St-Omer 68および KBR 10516だけである。St-Omer 68と KBR 10516の画家が共通の図像モデルを参照したことに疑いの余地は無い。

St-Omer 68の挿絵彩飾に関する以上の考察は、『十三世紀フランス語聖書』本文についてかねてより指摘されていた KBR 10516と St-Omer 68の写本伝承系統上の近接性を、美術史学的側面からも論証するものである。加えて、KBR 10516の画家とパリ-アッコンの画家とに認められる様式ならびに図像レパートリーの共通基盤を、St-Omer 68の画家もまた共有することを、新たに指摘するものである。

４．KBR 10516および St-Omer 68の制作地・制作年代をめぐって

ここまでの議論では、KBR 10516および St-Omer 68の制作地・制作年代の問題には直接触れずに、両写本の挿絵彩飾の様式やモティーフあるいは図像の比較分析を軸に、両写

本の画家間の関係や両画家がパリ-アッコンの画家と共有する芸術的基盤に注目した考察を進めてきた。しかしながら、本稿における比較考察の軸として参照してきたパリ-アッコンの画家については、(1) 1276年～1280年代初頭に至るパリでの活動、(2) エルサレム王国最末期（1280年代初頭～1290年頃）の聖地アッコンにおける活動、そして (3) 1290年代パリにおける同画家の追随者とされる画家たちの活動、がフォルダの一連の研究を通じて明らかにされてきたものの、パリ-アッコンの画家自身の様式的出自やこの画家と1290年代パリで活動したとされる追随者たちとの関係が実際にはいかなるものであったかについての具体的な議論はなされていない[47]。さらに本稿での我々の議論との関わりにおいて言えば、St-Omer 68およびKBR 10516の画家とパリ-アッコンの画家自身あるいは1290年代パリで活動したとされる追随者たちとの関係について、研究の現段階で具体的に考察することは困難であると言わざるを得ない。加えて、KBR 10516およびSt-Omer 68の制作地を論証する直接的な手掛りにも乏しいのが現状である。

以上の未解決の問題を念頭に置きつつ、本章では、実際に非常に近しい環境において制作されたと考えられるKBR 10516およびSt-Omer 68の制作地・制作年代あるいはその*milieu*を究明する手掛りとなる２つのトピックスについて、現時点で可能な限りの考察を加えておきたい。

(1)〈エッサイの樹〉（マタイによる福音書　扉絵）

〈エゼキエルの幻視〉や一連の知恵文学の扉絵からも看取されるように、St-Omer 68とKBR 10516は姉妹作品とも呼ぶべき関係にあり、少なくともその挿絵の一部は共通の図像モデルに依拠していると考えられる。しかしながら、前章までの議論では、そのモデル自体の出自について具体的に考察を進めることは困難であった。これに対し、マタイ伝冒頭に描かれた〈エッサイの樹〉は、両写本の画家が通暁していたであろう図像モデルの探究を通じ、彼らの活動あるいは芸術的形成の基盤となった地域を究明する手掛りとなる図像である。

エッサイからキリストに至る系譜を木の幹に準えて表現する〈エッサイの樹〉には多様な図像ヴァリエーションがあるが[48]、『十三世紀フランス語聖書』のマタイ伝冒頭に描かれる場合、その挿絵は新約聖書全体の扉絵として別格の扱いを受け、テクスト欄１コラム分のスペースを与えられた縦長画面の中心軸上にエッサイの子孫たちを垂直に積み上げる構図をとることが多い[49]。これに対し、St-Omer 68（図９）およびKBR 10516では、画面下辺の寝台に横たわるエッサイの脇腹から上方へとループ状の蔓を左右対称に伸ばした樹の中央部に、右手を挙げ祝福のポーズを取るダヴィデと思しき玉座の王（St-Omer 68）あるいは白いヴェールに冠を戴きオランスのポーズを取る聖母と思しき玉座像（KBR 10516）を、通常サイズの横長画面に、それぞれ単独で描く。

横長の限られたスペースに合わせ短縮したようにも見えるこれらの〈エッサイの樹〉は、しかしながら、英仏海峡を挟むイングランドおよびフランス北部で制作された13世紀

後半の作品に、興味深い類例を見出す。中心軸上の人物をマンドルラのように囲む蔓の左右にループ状の蔓を装飾的に配する意匠は、例えば、1280-90年頃イングランドで制作された『詩篇集』[50]冒頭の物語イニシアルＢ（図10）に、その淵源を認めることができる。ここでは、半身ないしは胸像形式で表されたエッサイの子孫たちが中心軸上の８の字形をなす蔓とその左右に伸びるメダイヨン形の蔓に囲まれているが、我々の聖書ではエッサイの子孫を中心軸上の一人に限定することにより図様が簡略化されていることを除けば、『詩篇集』と我々の聖書の挿絵は左右に伸びる蔓の形状に至るまで酷似している。この『詩篇集』の挿絵画家は、『十三世紀フランス語聖書』の旧約部分を単体で収録した Add. 40619-20の歴代誌上冒頭の〈アダムの子孫の系譜〉を描く物語イニシアルＡに、メダイヨン形の蔓を主体とするヴァリアント（図11）を描いているが[51]、この意匠は、大陸でカンブレ司教ニコラ・ド・フォンテーヌのために制作された1266年の年記を持つ『朗読用福音書・書簡集』のマタイ伝冒頭の物語イニシアルＬ（図12）に、すでに見出されるものである[52]。

St-Omer 68および KBR 10516のマタイ伝冒頭に描かれた〈エッサイの樹〉は、両写本の画家たちが13世紀後半に英仏海峡を挟むイングランドおよびフランス北部で普及した図像タイプに通暁していたことを物語る。もとより、両写本がフランス北部に由来する可能性は、上述のように、写本自体の伝来や14世紀に遡る付加テクストの言語学的特徴が示唆するところでもある。蛇足ではあるが、St-Omer 68の「知恵の書 Sapience」扉絵（図５）の騎士が持つ盾に描かれた紋章がフランドル伯紋章（*d'or au lion rampant de sable*）の反転画像であることも、同写本の由来する地理的範囲を限定する一助となろう。

なお、上述の『詩篇集』（図10）は、写本中の紋章学的与件によれば、イングランド王エドワード１世王子アルフォンソ（1284年没）とホラント伯フローリス５世の息女マルガレーテとの婚約（1281-84年）を機に制作が始められた可能性があるという[53]。フローリス５世を継いだヤン１世には継嗣が無くホラント伯家は断絶（1299年）し、伯領はエノー伯アヴェーヌ家に移った。『詩篇集』の画家の手になる Add. 40619-20（図11）にはこのフランス語聖書の初期伝来を明かす直接的な手掛りは見出されないが、この画家と『詩篇集』との関わりを考えるならば、Add. 40619-20は英仏海峡対岸の諸州との因縁浅からぬ注文主のためにフランス北部由来の写本をモデルとして『詩篇集』とほぼ同時代に制作された可能性がある。いずれにせよ、『詩篇集』および Add. 40619-20の画家が1260年代のカンブレに先行例のある〈エッサイの樹〉図像（図12）に通じていたことは、疑いない。付言すれば、後に、エノーおよびホラント伯領は、（遅くとも15世紀第１四半期頃には KBR 10516を所有していた）バイエルンのヴィッテルスバッハ家を経て（1345年）、1433年、KBR 10516同様、ブルゴーニュのフィリップ善良公の手に渡ることになる（上記参照）。13世紀後半以降のアルトワ、フランドル、エノー、ホラントおよびイングランドをめぐるジオポリティカルな歴史状況は、期せずしてあるいはすべからく、『十三世紀フランス語聖書』が交錯する場を提供したと言えよう。

(2)　彩飾および物語イニシアル

KBR 10516の挿絵彩飾は１コラム分の幅のパネル状ミニアテュールと朱・青２色のインクによるフィリグラン（線条装飾）イニシアルに限定される。これに対し、St-Omer 68には、上記の要素に加え、ロマ書冒頭のパネル状ミニアテュールに続く大型の彩飾イニシアル１点と、書簡部分に配された計10点の物語イニシアルが見出される。制作地を明らかにする様式的指標に乏しいパネル状ミニアテュールやフィリグラン・イニシアルに対し、これらの彩飾および物語イニシアルの何点かは、地域的な特徴をより明確に備えた作例との比較を可能にする。

St-Omer 68中唯一の大型彩飾イニシアルＰ（図16）は、イニシアル内部を満たすアラベスク文様のパターンや彩色において、同時代の作例とは異質の様相を呈する。13世紀後半の一般的な植物文系彩飾イニシアル（initiale fleuronnée）の場合、文字本体の内側を蔦の葉やドラゴン頭部などを伴う蔓草のアラベスク文様で埋め、交叉する蔓草の囲むスペースにブルーやピンクあるいは金を施すことが多い[54]。アラベスク文様は左右対称の場合もあれば不規則な曲線を描く場合もあるが、いずれにせよ植物的なしなやかさを留めている。これに対し、St-Omer 68の彩飾イニシアルＰ内部の楕円形スペースに描かれたアラベスク文様は、蔓草と言うよりは、太さが一定のワイヤーのような硬質のラインにより、文字中心部の赤いドットを中心点とする無機質な点対称の図形として描かれている。赤いドットを起点にＳ字形を作る上下の曲線は先端が分岐し、更に内側に巻き込むラインとＳ字形本体と交叉して外側に突出するラインとに分かれ、交叉するラインの内側は金地で埋められている。渦巻状に巻き込んだ曲線の内側を埋める金地がイニシアル総面積に占める割合は大きく、イニシアルにさらに硬質かつ無機質な印象を与える。

St-Omer 68のイニシアルＰ内部のアラベスク文様は植物文系彩飾イニシアルとしては異質であるが、その文様パターンは、1260年代にフランス北部で制作されたと見られるピアポント・モーガン図書館所蔵の大型ラテン語聖書[55]中の物語イニシアルに、幾つかの類例を見出す（図18）。例えば、マルコ伝冒頭の物語イニシアルＩ（Initium evvangelium ...）では、文字本体の内部を３階建の塔に見立て、福音書記者の立像、跪く祈祷者、福音書記者の象徴・獅子を各階に配するが、イニシアル下端の基礎部分を支えるドラゴンの尾から蔓草へと転じページ下端余白へと伸びるアンテナ装飾の先端部は、金地を囲み渦巻状に巻き込む曲線の先端が方向を転じて延伸し蔓と交叉しつつアンテナの左側に突出するパターンを描く。こうしたパターンは13世紀後半にフランス北部で制作された大型ラテン語聖書のアンテナ装飾先端部のモティーフとしては特段珍しいものではないが、St-Omer 68のイニシアルＰのようにこれを厳格な点対称の文様としてイニシアル内部に適用した例を筆者は他に知らない。

モーガン図書館の大型ラテン語聖書とSt-Omer 68の間には、彩飾イニシアルＰ以外にも、興味深い対応例が見出される。St-Omer 68に含まれる２点の物語イニシアルＩ（ヤコブおよびユダの書簡）（図17）では、文字本体内部のアーチ形天井とアーチで下支えさ

れた床により区切られたスペースに使徒が立ち、左右を２本の軸で挟まれたイニシアル下端の床下部分には、下方へと伸びる尾の先端が蔓草に転じたドラゴンが控える。ユダ書冒頭のイニシアルでは、頚を背中側に折り返すようにして一方の軸に絡ませたドラゴンが上階に立つ使徒を見上げるように頭部を垂直にもたげているが、この表現は、多分にぎこちないとは言え、枠取りとなるアーチ形も含め、ラテン語聖書のマルコ伝冒頭イニシアル下端部のドラゴンに酷似している（図18）[56]。また、このユダ書イニシアルの上端部から不器用に飛び出た軸の先端に爪先立ちする半人半獣のグロテスクも、ラテン語聖書に散見するドロルリー・モティーフである。

St-Omer 68とモーガン図書館のラテン語聖書の間に認められるイニシアル意匠の類似は、一方で、前者の表現に看取される一種の違和感あるいはぎこちなさを際立たせる。これは、おそらく一世代前（1260年代）の豪華で入念な仕上げの大型ラテン語聖書の装飾語彙を比較的簡素な造りの中型俗語版聖書に簡略化して取り込んだ際に生じた、一種のミスマッチあるいはアナクロニックな偏差に起因するのではなかろうか。実際に St-Omer 68の画家が参照したモデルを特定することはできないが、この画家が、13世紀第３四半期にフランス北部で制作された大型ラテン語聖書[57]に特徴的な装飾語彙を含むおそらく一世代前の写本作品を参照した可能性は高いと思われる。

KBR 10516および St-Omer 68のマタイ伝扉絵の〈エッサイの樹〉ならびに St-Omer 68の彩飾・物語イニシアルに関する以上の考察は、両写本の画家が、13世紀中葉以降絶え間ない緊張関係にあったアルトワ、フランドル、エノー伯ら[58]の支配領域、あるいは英仏海峡対岸のイングランドにおいて、1260〜90年代初頭に制作された彩飾写本のいわば芸術的語彙に通じていたことを示す。その一方で、イニシアル装飾に看取されるアナクロニックな違和感、鋭角的な衣襞表現を特徴とする1260年代制作のカンブレ司教の『朗読用福音書・書簡集』（図12）やモーガン図書館のラテン語聖書に比べより弛緩した衣襞表現、さらに1280〜1290年代初頭に活動の中心があるパリ-アッコンの画家との様式的な類似あるいは並行関係を勘案するならば、KBR 10516および St-Omer 68の画家の活動時期ひいては２点の『十三世紀フランス語聖書』の制作時期を1280-1290年代初頭に位置付けるのが、現時点では妥当であると思われる。

５．結語にかえて

KBR 10516および St-Omer 68に関する本論の考察は、『十三世紀フランス語聖書』写本テクストの初期伝承において同系統に属するとされる両写本が、美術史学的側面においても密接な関係にあることを示した。同時に、パリおよびアッコンの地でフランス語聖書の展開に重要な役割を果たしたパリ-アッコンの画家と KBR 10516および St-Omer 68の

画家との関係を探ることにより、未だに謎の多いパリ-アッコンの画家の様式的基盤や図像学的源泉について、僅かなりとも光を当てようと試みてきた。

本稿においても示唆したように、『十三世紀フランス語聖書』の初期段階の普及・伝播においてフランス北部地方の果たした役割には、少なからぬものがある。今後の研究においては、本論第１章において紹介したクライヴ・スネッドンの初期写本伝承系統図における初期段階 x に属する写本作品の中でも北部地方に由来する作品に考察を進め、十字軍遠征にとりわけ関与の深い諸侯を輩出した北部地方におけるフランス語聖書の伝播・普及・受容の諸相を究明する端緒としたい[59]。

【本論で取り上げる『十三世紀フランス語聖書』主要写本の略号一覧】（アルファベット順）

・Add. 40619-20＝London, British Library, Additional ms. 40619-20『十三世紀フランス語聖書』旧約聖書（創世記～マカバイ記）：イングランド、1285-90年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 26, pp. 185-190.

・Chantilly 5＝Chantilly, Musée Condé, ms. 5（mss. 4 & 5）『十三世紀フランス語聖書』完本・後半部（箴言～黙示録；前半部は ms. 4）：パリ、1300年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 1, pp. 142-144.

・Fr. 899＝Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. fr. 899『十三世紀フランス語聖書』部分（創世記、出エジプト記、民数記～詩篇、４福音書、使徒行伝、公同書簡（ヤコブ、１ペトロ，２ペトロ）、黙示録）：パリ、1270-75年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 4, pp. 148-151.

・KBR 10516＝Bruxelles, Bibliothèque royale de Belgique / Koninklijk Bibliotheek van België, ms. 10516『十三世紀フランス語聖書』後半部（箴言～黙示録）：北フランス、1280-90年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 14, pp. 164-165.

・M. 494＝New York, Pierpont Morgan Library, ms. M. 494『十三世紀フランス語聖書』完本：パリ、1280年代初頭。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 3, pp. 146-148.

・St-Omer 68＝Saint-Omer, Bibliothèque d'Agglomération, ms. 68『十三世紀フランス語聖書』後半部（箴言～黙示録）：北フランス、1280-90年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 24, pp. 181-184.

・Thott. 7° 2＝Copenhagen, Royal Library, ms. Thott. 7° 2『十三世紀フランス語聖書』後半部（詩篇～黙示録）パリ、1290-1300年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 15, pp. 165-166.

・Y. Thompson 9＝London, British Library, Yates Thompson ms. 9（＝*olim* Additional ms. 41751）『十三世紀フランス語聖書』完本・後半部（箴言～黙示録；前半部は London, British Library, Harley ms. 616）：パリ、1280-85年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 2, pp. 144-146.

【図版リスト】

1．ブリュッセル、ベルギー王立図書館　10516番写本 『十三世紀フランス語聖書』 フォリオ23　知恵の書　扉絵
2．ブリュッセル、ベルギー王立図書館　10516番写本 『十三世紀フランス語聖書』 フォリオ114　エゼキエル書　扉絵
3．ブリュッセル、ベルギー王立図書館　10516番写本 『十三世紀フランス語聖書』 フォリオ136v　ダニエル書　扉絵
4．ブリュッセル、ベルギー王立図書館　10516番写本 『十三世紀フランス語聖書』 フォリオ155　ヨナ書　扉絵
5．サントメール、市立図書館　68番写本 『十三世紀フランス語聖書』 フォリオ21v　知恵の書　扉絵
6．サントメール、市立図書館　68番写本 『十三世紀フランス語聖書』 フォリオ30v　集会の書　扉絵
7．サントメール、市立図書館　68番写本 『十三世紀フランス語聖書』 フォリオ135　ミカ書　扉絵
8．サントメール、市立図書館　68番写本 『十三世紀フランス語聖書』 フォリオ140v　ゼファニヤ書　扉絵
9．サントメール、市立図書館　68番写本 『十三世紀フランス語聖書』 フォリオ156v　マタイ伝　扉絵
10. ケンブリッジ、フィッツウィリアム美術館　2-1954番写本 『詩篇集』 フォリオ１　詩篇１　イニシアルＢ
11. ロンドン、大英図書館　Add. 40619番写本 『十三世紀フランス語聖書』 フォリオ163　歴代誌上　冒頭イニシアルＡ
12. カンブレ、市立図書館　189番写本 『朗読用福音書・書簡集』 フォリオ163　マタイ伝　冒頭イニシアルＬ
13. パリ、フランス国立図書館　フランス語9084番写本 『エルサレム王国年代記』 フォリオ89v　第８書　扉絵
14. パリ、フランス国立図書館　ラテン語11907番写本 『ジョワンヴィルの信仰信条』 フォリオ231
15. ニューヨーク、ピアポント・モーガン図書館　M 494番写本 『十三世紀フランス語聖書』 フォリオ187v　列王記２　扉絵
16. サン・トメール、市立図書館　68番写本 『十三世紀フランス語聖書』 フォリオ213v　ロマ書　冒頭イニシアルＰ
17. サン・トメール、市立図書館　68番写本 『十三世紀フランス語聖書』 フォリオ266　ユダ書　冒頭イニシアルＩ
18. ニューヨーク、ピアポント・モーガン図書館　M. 851-3（M. 111断片）『ラテン語聖書』 マルコ伝　冒頭イニシアルＩ

註

1　本論は、筆者が2002年度に鹿島美術財団より研究助成を受けた研究について2003-2004年に発表した２件の研究報告（「13世紀フランスを中心とする聖書図像の伝播・交流に関する研究-『十三世紀フランス語聖書』写本挿絵の展開-」鹿島美術財団編『鹿島美術研究年報』第20号別冊、平成15（2003）年、p. 471-480、および2004年５月鹿島美術財団にて口頭で行った研究報告）においてその概要を示した、『十三世紀フランス語聖書』彩飾写本研究の続編である。

2　『十三世紀フランス語聖書』写本テクストに関する主要な研究としては、拙論「『十三世紀フランス語聖書』（*Bible française du XIIIe siècle*）彩飾写本研究：最初期の作例について」、『実践女子大学美學美術史學』第23号（2009）、pp.（39）-（53）；拙論、「『十三世紀フランス語聖書』（*Bible française du XIIIe siècle*）彩飾写本研究：〈パリ-アッコンの画家〉帰属作品について」、『実践女子大学美學美術史學』第24号（2010）pp.（39）-（55）、および以下の註５、８に引用した文献を参照。

3　主要な『十三世紀フランス語聖書』挿絵入り写本については、註１に引用した拙著2003年中のリストを参照（修正の必要あり）。

4　以下、本論で言及する主要写本作品は略号で表記する。文末の略号一覧を参照。

5　BERGER（S.）: *La Bible française au Moyen Age. Etude sur les plus anciennes versions de la Bible écrites en prose de langue d'oïl*. Paris, 1884, chap. 3.

6　Fr. 899については、BERGER 1884, pp. 111 sqq., 204 sqq., 340 ; 拙論2009年を参照。

7　BERGER 1884, p. 383. しかしながら、実際には挿絵彩飾の様式からは本作の制作年代を1300年代以降とすることはできず、『十三世紀フランス語聖書　後半部』とすべきである。

8　Cf. DE POERCK（G.）, La Bible et l'activité traductrice dans les pays romans avant 1300, in : *Grundriss der romanischen Litteraturen des Mittelalters, vol. VI : La littérature didactique, allégorique et satyrique*, Heidelberg, 1968-1970, 2 vols., I, pp. 21-48 & II, pp. 54-80 ; DECOO（W.）, La Bible française du XIIIe siècle et l'Evangile selon Marc. Remarque critique, in : *Romanica Gandensia*, 12（1969）, pp. 53-64 ; SNEDDON（C. R.）, *A Critical Edition of the Four Gospels in the Thirteenth-Century Old French Translation of the Bible*. Ph. D., 2 vols., University of Oxford, 1978 ; Idem., The "Bible du XIIIe siècle": its Medieval public in the light of its manuscript tradition, in : LOURDAUX（W.）, VERHELST（D.）, éd., *The Bible and Medieval culture*, Leuven, 1979, pp. 127-141 ; Idem., Pour l'édition critique de la Bible française du XIIIe siècle, in : *La Bibbia in Italiano tra Medioevo e Rinascimento. Atti del Convegno Internazionale, Firenze, Certosa del Galluzo, 8-9 nov. 1996*, Firenze, 1998, pp. 229-254 ; Idem., The Origins of the 'Old French Bible' : The Significance of Paris, BNF, ms. fr. 899, in : *Studi francesi*, CXXVII（1999）, pp. 1-13 ; Idem., Rewriting the Old French Bible : the New Testament and Evolving Reader Expectations in the Thirteenth and Early Fourteenth Centuries, in : SAMPSON（R.）, AYRES-BENNETT（W.）, éd., *Interpreting the History of French. A Festschrift for Peter Rickard on the occasion of his eightieth birthday*. Amsterdam / New York, 2002, pp. 35-59 ; Idem., On the creation of the Old French Bible, in : *Notthingham Medieval Studies*, XLVI（2002）, pp. 25-44 ; BURGIO（E.）, I volgarizzamenti oitanici della Bibbia nel XIII secolo（un bilancio sullo stato delle ricerche）, in : *Critica del testo : Storia, geografia, tradizioni manoscritte*, VII/1（2004）, pp. 1-40.

9　Cl.スネッドンによる福音書伝承系統図は、1978年の博士論文掲載のそれ（p. 64）が最も包括的であり『十三世紀フランス語聖書』初期写本に加え『増補版歴史物語聖書』後半部を収録する写本の伝承系統も示しているが、それ以降の論文において修正が加えられている。Cf. SNEDDON 1978, t. 1, p. 64 ; Idem., 1998, p. 241-242 ; Idem., 1999, p. 10 ; Idem., 2002, *Festschrift*, p. 38.

10　Cf. BERGER 1884, p. 119, 147-148, 423-424 ; VAN DEN GHEYN（L.）, éd., *Catalogue des manuscrits de la Bibliothèque royale de Belgique (écriture sainte et liturgie)*, tome 1, Bruxelles, 1902, no. 94, p. 45 ; SNEDDON, 1978, vol. 1, p. 19, p. 164-165（catalogue no. 14）; Idem 1998, p. 214, 238, 241 ; Idem 1999, p. 10, 12-13 ; Idem. 2002 *Festschrift*, p. 39 sqq, 53 note 16, 55 note 31 ; BURGIO 2004, p. 33.

11　Cf. BARROIS（J.）, *Bibliothèque prototypographique, ou librairies des fils du roi Jean, Charles V, Jean de Berri, Philippe de Bourgogne et les siens*, Paris, 1830, no. 850 ; DOUTREPONT（G.）, *La littérature française à la cour des ducs de Bourgogne*, Paris, 1909, p. 206, n. 3.

12　Cf. BARROIS 1830, no. 1770.

13　DURRIEU（P.）, Manuscrits de luxe exécutés pour des princes et des grands seigneurs français. 4 : Bible française de ducs de Bourgogne, in : *Manuscrits*, 2（1895）, pp. 82-87, 98-103, 114-122, 130-135, 145-149.

14　1884年のベルジェの著作において言及されているベルギー王家の紋章を加えたナポレオン１世による装丁（«Reliure de Napoléon Ier, marquée des armes royales belges» ; BERGER 1884, p. 423）は、保存上の理由からか、現在では全く新しい（20世紀末？）の装丁に置き換えられている。

15　BERGER 1884, p. 424およびDOGAER（G.）& DEBAE（M.）, éd., *La librairie de Philippe le Bon*（catalogue d'exposition）, Bruxelles, Bibliothèque royale de Belgique, 1967, p. 10, no 2. では50点とするが、これは51点の誤り。

16　*Les manuscrits à miniatures. I. Du VIIIe siècle à 1350*（catalogue d'exposition）, Bruxelles, 1937, no. 107.

17　GASPAR（C.）& LYNA（Fr.）, éd., *Les principaux manuscrits à peintures de la Bibliothèque royale de Belgique*, 2 vols, Bruxelles / Paris, 1937（réédition 1984）.

18　Exposition Bruxelles 1967, p. 10, no 2.

19　BRANNER（R.）, *Manuscript Painting in Paris during the Reign of Saint Louis*, Berkeley, 1977.

20　FOLDA（J.）, *Crusader Manuscript Illumination at Saint-Jean-d'Acre 1275-1291*. Princeton, 1976.

21　例えば、fol. 16v, 21, 150など。

22　例えば、fol. 32v, 168v, 292v, 317, 318, 320v など。

23　Fol. 321（黙示録扉絵）.

24　パリ-アッコンの画家については、FOLDA 1976, esp., pp. 42-116, 142-158 ; Idem., *Crusader Art in the Holy Land, from the Third Crusade to the Fall of Acre, 1187-1291*. Cambridge U.P., 2005, pp. 411-435, esp., p. 411-412 ; Idem., *Crusader Art. The Art of the Crusaders in the Holy Land, 1099-1291*. Aldershot, 2008, esp., pp. 146-163, esp., p. 149-153 ; および拙論2010年を参照。

25　フォルダも指摘するように、この土坡はパリ-アッコンの画家とその影響を受けた画家たちに特徴的なモティーフである。Cf. FOLDA 1976, p. 123.

26　例えば、箴言、イザヤ書、エゼキエル書、ダニエル書、ヨナ書、マタイ伝などの扉絵。

27 『ジョワンヴィルの信仰信条』挿絵断片（Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. lat. 11907, fol. 231）との比較。同写本について、フォルダ（cf. FOLDA 1976, pp. 103-110 ; Idem., 2005, p. 500-502）は、制作地をアッコン、制作年代を1288-90年頃とし、今日失われた同地の礼拝堂壁画の下絵であった可能性を指摘している。この『ジョワンヴィルの信仰信条』挿絵断片については、FRIEDMAN（Lionel J.), *Text and Iconography for Joinville's Credo*（Mediaeval Academy of America Publication, no. 68), Cambridge（Mass.), 1959 ; SCHELLER（Robert W.）/ trad. HOYLE（Michael), *Exemplum. Model-Book Drawing and the Practice of Artistic Transmission in the Middle Ages (a. 900-1470).* Amsterdam, 1995, pp. 194-200を参照。。

28 M. 494, fol. 439v との比較（パリ-アッコンの画家に非常に近い様式を示す第３の画家による挿絵；この第３の画家による〈エゼキエルの幻視〉については、拙論2010年、pp.（44）-（45）、図９を参照）。同様の表現は、パリ-アッコンの画家の追随者による Thott. 7° 2の同主題の挿絵（fol. 196v）にも認められる。

29 〈大魚の口から脱出するヨナ〉の場合、上述の『ジョワンヴィルの信仰信条』と KBR 10516の挿絵間の緊密な類似性は、ヨナの着衣および両手のポーズが異なるにもかかわらず、例えば、M. 494の主要画家の手になるヨナ書の同主題の扉絵（fol. 478v：上下２段に分かれた画面の上段にはニネヴェの都と天から見守る神を、下段には魚の下顎に腰掛けるように右膝を折り上半身を現したヨナを完全な側面観により描く）や、『ジョワンヴィルの信仰信条』と同系統の挿絵を含む13世紀末シャンパーニュ制作のミサ典書（Saint-Pétersbourg, National Library of Russia, ms. lat. Q. v. I, 78）中の同主題の挿絵（cf. FRIEDMAN 1959, pl. XV；VORONOVA（Tamara）& STERLIGOV（Andrei), *Manuscrits enluminés occidentaux. VIIIe-XVIe siècle à la Bibliothèque nationale de Russie de Saint-Pétersbourg*, Saint-Pétersbourg, 1996, p. 53, fig. no. 19-43, fig. 30；このミサ典書挿絵に描かれた、二股に分かれた木の枝を掴むヨナの上半身のポーズは、『ジョワンヴィルの信仰信条』挿絵に共通するが、下半身は長い衣に完全に隠れる）と KBR 10516の挿絵との相違からも、確認することができる。〈エゼキエルの幻視〉については、例えば、Chantilly 5, fol. 135v の同主題の挿絵は、画面四隅にかかる雲からそれぞれ頭部を突き出す四活物が画面中央の寝台に横たわる預言者を囲む構図を示す点で、KBR 10516の挿絵とは明確に異なる。

30 Cf. MICHELANT（H. -V.), *Catalogue général des manuscrits des bibliothèques publiques des départements. Tome III. Catalogue des manuscrits des bibliothèques de Saint-Omer, Epinal, Saint-Dié, Saint-Mihiel, Schlestadt*, Paris, 1861, pp. 42-43 ; BERGER 1884, p. 220, 383 ; SNEDDON 1978, t. 1, p. 19, 113, 181-184（cat. no. 24）; Idem., 1998, pp. 229-254, esp., p. 214, 238, 241, no. 2 ; Idem., 1999, p. 10 ; Idem., 2002 *Festschrift*, p. 53, note 16 ; BURGIO 2004, p. 33.

31 巻頭に加えられた７葉よりなる折丁（fol. A-G）冒頭の fol. A verso には、このローマ数字による旧フォリオ番号を記した本書収録の聖書各書一覧（目次）がある。おそらく旧フォリオ番号と同時に書き込まれたものであろう。

32 Cf. BERGER 1884, p. 383 ; SNEDDON 1978, t. 1, p. 181-184.

33 アリストテレスの短詩（fol. 275v, col. A-277v, col. B：14世紀）、十二使徒および九大英雄の一覧（fol. 277v, col. B-278r：15世紀；例えば«*Che* sont les noms . . .»）、巻頭のブルネット・ラティーニ著作からの抜粋（fol. Cr-Ev：14世紀；例えば«au *tierch* livre . . .»）等。Cf. SNEDDON 1978, t. 1, p. 181（ア

リストテレスの短詩について）.

34　巻末の折丁 fol. 276-278の追加が14世紀に遡ることは、アリストテレスの短詩（fol. 275v, col. A-277v, col. B）が聖書本体の黙示録の末尾と同一フォリオ面（fol. 275v, col. A）から巻末の追加折丁に続けて書き込まれていることにより、確認される。

35　VITZTHUM（G.）, *Die Pariser Miniaturmalerei von dem Zeit des Hl. Ludwig bis zu Philipp von Valois*, Leipzig, 1907, p. 103.

36　*L'art du Moyen Age en Artois*（catalogue d'exposition）, Arras, 1951, p. 60, no. 63 ; *Image et geste au Moyen Age*（catalogue d'exposition）, Arras, Musée des Beaux-Arts, 1993, p. 36, fig. 39.

37　例えば、fol. 19v, 142v, 148, 175, 213v, 220v, 232, 266v など。

38　拙論2010年、図３および６を参照。

39　例えば、FOLDA 1976, pls. 101-103, 108, 123, 133, 145, 147, 150, 152, 157, 237を参照。

40　同様の構図は、パリ-アッコンの画家の追随者により1300年頃パリで制作されたとされる（cf. FOLDA 1976, pp. 152-155, 212）Thott. 7° 2の同書扉絵（fol. 196v）にも認められる。

41　KBR 10516がSt-Omer 68を直接の手本としていないことは、KBR 10516の「集会の書」扉絵（fol. 32v）に誤って適用された「コヘレトの言葉」扉絵図像が、St-Omer 68の同扉絵（fol. 15）とは人物の配置や持物等の細部表現において異なることから、確認される。下記註44参照。

42　ベルジェがすでに指摘しているように（BERGER 1884, p. 423）、KBR 10516には写本本文レヴェルの誤りも目立つ。「知恵の書」冒頭のイニシアルＱ（図１）は、Ａ（Amez justice ...）の誤り、「箴言」（fol. 1）冒頭のイニシアルＤはＬ（Les Paraboles Salmon ...）の誤りである。

43　「すべての知恵は、主から来る。主とともに永遠に存在する。」（「集会の書」１章１節；邦訳は日本聖書教会発行の『新共同訳聖書』に拠る）

44　一方、「集会の書」の扉絵（fol. 32v）には、通常は「コヘレトの言葉」の扉絵として描かれる図像（玉座に座す王が、足下に横たわる死んだ若者を指さす女に、百合の花を示す）がそのまま適用されている。上記註41参照。

45　「国を治める者たちよ、義を愛せよ、善良な心で主を思い、素直な心で主を求めよ。」（「知恵の書」、１章１節；同上）

46　この他にも、〈助祭の式服をまとった祭司に天使が告知する〉場面を描くマルコ伝の扉絵（KBR 10516, fol. 211）は、ルカ伝冒頭の〈ザカリアへの告知〉が誤って適用されたものと思われる。

47　パリ-アッコンの画家とその追随者を巡る議論については、上記の註24に挙げた文献を参照。

48　Cf. *Lexikon der christilichen Ikonographie*. Freiburg im Breisgau, 1974, Bd 4, cols. 549-558 «Wurzel Jesse».

49　マタイ伝の扉絵は逸失例が少なくないが（Fr. 899, M. 494等）、例えば、Y. Thompson 9, fol. 188（cf. MILLAR（E.G.）, *Souvenir de l'exposition de manuscrits français à peintures organisée à la Grenville Library (British Museum)*, Paris, 1933, pl. XVIII）がその例として挙げられる。

50　Cambridge, Fitzwilliam Museum, ms. 2-1954. Cf. SANDLER（L.F.）, *Gothic Manuscripts 1285-1385*, 2 vols., London, 1986, cat. no. 10 ; WORMALD（Fr.）& GILES（Ph.）, *A Descriptive catalogue of the additional illuminated manuscripts in the Fitzwilliam Museum acquired between 1895 and 1979 (excluding McClean collection)*. 2 vols., Cambridge, 1982, pp. 475-479, pl. 13.

51　Add. 40619の〈エッサイの樹〉挿絵については、1348年サン・トメールで制作された『歴史物語聖書』（Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. fr. 152, fol. 467v）や13世紀末ヘント制作の『詩篇集』（Oxford, Bodleian Library, ms. Liturg. 369, fol. 15v）中の同主題挿絵との図像比較において、取り上げたことがある。Cf. 拙論 2003年、pp. 477-478、図１。

52　Cambrai, Bibliothèque municipale, ms. 189-190. 1266年に写字生 Johannes Phylomena により筆写されたカンブレ司教の『朗読用福音書・書簡集』を始めとする、いわゆるフィロメナ・グループの彩飾写本については、以下の文献を参照。BEER（E.), Das Scriptorium des Johannes Philomena und seine Illuminatoren. Zur Buchmalerei in der Region Arras-Cambrai, 1250 bis 1274, in : *Scriptorium*, 23（1969), pp. 24-38, pls. 4-13 ; Eadem., Liller Bibelcodices, Tournai und die Scriptorien der Stadt Arras, in : *Aachener Kunstblätter*, 43（1972), pp. 190-226 ; CLARK（Willene B.), A reunited Bible and 13th-century illumination in northern France, in : *Speculum*, 50/1（1975), pp. 33-47 ; STONES（A.), *The Minnesota Vincent of Beauvais Manuscript and Cistercian Thirteenth-century Book Decoration*（The James Ford Bell Lectures, no. 14), Minneapolis, 1977 ; GABORIT-CHOPIN（D.) et al., *L'Art au temps des rois maudits. Philippe le Bel et ses fils 1285-1328*（catalogue d'exposition), Paris, 1998, no. 197, pp. 292-293（notice par Fr. AVRIL).

53　Cf. WORMALD & GILES, 1982, p. 475.

54　例えば、拙論 2010年、図５、９、12を参照。

55　New York, Pierpont Morgan Library, M. 109-111, M. 851. 1-4（M. 109-111本体から切断された零葉４点）; cf. DE RICCI（S.) & WILSON（J.W.), éd., *Census of Medieval and Renaissance Manuscripts in the United States*. 2 vols., New York, 1935, 1937, vol. 2, p. 1387.

56　これ以外にも、M. 111, fol. 27v（エステル記冒頭物語イニシアルＬ）、M. 111, fol. 138v（ヨハネ伝冒頭物語イニシアルＩ）、M. 851-1（M. 109零葉；ルツ記冒頭物語イニシアルＩ）などが下端部に同様のドラゴンを伴う。特に、M. 111, fol. 138v と St-Omer 68, fol. 258v（ヤコブ書冒頭イニシアルＩ）のドラゴンは、蔓草に転じた尾の描くアラベスク文やイニシアル下端部より左右に分岐する蔓のパターンなど、細部に至るまで酷似する。

57　13世紀第３四半期フランス北部の大型ラテン語聖書写本彩飾については、BEER（E.), Zum Problem des "Biblia Porta", in : BEER（E.), HOFER（P.), MOJON（L.) éd., *Festschrift Hans R. Hahnloser zum 60 Geburtstag 1959*, Basel / Stuttgart, 1961, pp. 271-287 ; Eadem 1969 ; Eadem 1972 ; CLARK 1975 を参照。ただし、これらの論文では、問題の３巻本聖書 M. 109-111は取り上げられていない。

58　この時期のフランドル、エノー、アルトワ地方のジオポリティカルな歴史状況とフランドルおよびエノー女伯ジャンヌおよびマルグリットによる統治および文化メセナをテーマとする近年の論考として、DESSAUX（Nicolas) et al., *Jeanne de Constantinople, comtesse de Flandre et de Hainaut*（catalogue d'exposition, Lille), Paris, 2009を参照。

59　本論は、日本学術振興会による科学研究費補助金（基盤研究Ｃ）の対象である研究課題の一部をなすものである。ここに明記して謝意を表したい。

2

1

4

3

6

5

8

7

10

9

11

12

13

14

15

16

17

18